



南波 浩先生近影

南波 浩教授を送る

古稀の故をもって南波先生が来る三月三十一日定年退職されることになっている。あまり古いことは筆者は知らないが、先生は、もうかれこれ四十年近くも以前、即ち戦後すぐに同志社にお出でになり、国文学専攻及び大学院を開設しその充実に献身して来られた。専攻にとつては最大の功労者である。それがこの三月でいよいよ退職されるという。規定によってやむを得ないこととはいえまことに残念至極惜別の情に堪えない。

先生は言うまでもなく中古文学研究者として日本文学協会・中古文学会等の中心的存在で、我々またその指導下にあつて恩恵を被ることが多かつたのである。それというのも先生が秀れた研究者である半面、温和な人柄によつて常に人々に愛せられ親しまれるということがあつたからである。さらに先生は実務に長じた、極めた敏腕家であり、しかも軽々しく中央に飛び出すようなたちではなく、実力を貯えてじつと上京の時期を待ついわば戦国の雄という感もあつて、或る意味では恐れられた存在であつた。まことに外柔内剛とは先生のような人を言うのであろう。

このように三拍子揃つた大物を指導者にいただいてこれ以上何を望むことがあろうか。本当に我々は幸せであつたと思ふのである。それが今度、先生を送り出さねばならないことになつた。惜しんでも余りあることである。幸い、今後益々御健康にて所期の御研究を続行され、これまで同様の御指導をお願い出来れば喜びこれに過ぎるものはない。

(松下貞三記)